

シーンライティング

熊本大学建築学科3年生の設計演習で、「シーンライティング (Scene Writing)」と呼ぶ手法を用いて授業をする。外部講師として母校に協力するもので、自分の研究にもなる。

課題は、熊本市中心市街地の上通地区及び上乃裏通りの都市構造の改善（交通の整序化、緑化、デザインルール設定等）や、低利用地（平面駐車場等）を敷地として選定した上でそこに建築提案を行うことである。

シーンライティングとは、自由に設定した人物（年齢、性別、社会的地位、趣味等）が、上通地区において、どのような活動をするかを思い描き、それを文章で表現するものである。

本格的な設計の経験がなく、また生活体験も乏しい学生は、なかなか具体性のある提案をつくれぬ。また、都市が発するメッセージに気づけないし、気づいても表現することができない。シーンライティングは、こうした“未熟練者”が、計画地の特徴を多方面から捉え、提案すべき建築や都市空間をイメージすることを促す手法である。この作業を重ね深度化すれば、都市づくりの“シナリオライティング”につながっていく。

とは言え、シーンをどうイメージし表現すればよいか分からないだろうから、次のような例を示した。ポイントは、主人公とまち・建築空間との関係が生き生きと伝わることである。



明子（仮名）は、熊本市内のマンションに家族と同居する20代後半の独身女性。金融系企業に勤務している。休日は愛車でドライブもするが、阿蘇や天草まで足を伸ばし、新しくできたレストランを食べ歩くのにも飽きてきた。高速バスの回数券をディスカウントで買って週末ごとに天神に出かけていたのは、就職して2、3年の間までだ。

最近、母親（50代前半）と上乃裏通りでショッピングすることが多い。手作りの革バッグなどを置いているお気に入り店があり、その店員とのオシャベリが楽しみで必ず立ち寄る。店の前は、バラやコニファーのプランターで飾られており、季節を感じられるのがよい。店員は2人で、一人は20代前半の女性、もう一人は店のオーナーで50代の女性。明子はオーナーとの会話が楽しみで、母親は若い店員から流行の話題を聞くことが楽しみである。そう言えば、最近、明子たちと同じような母娘カップルを街でよく見かけるようになった。同じブランドの洋服を身につけ、街あるきを楽しんでいる。彼女たちは、馴染みの店でオシャベリをし、たまに買い物をするということを繰り返しているだけだが、街の緑や店内の商品が季節に応じて替わっていくことを、ゆっくり楽しんでいる。馴染みの街をもつ満足感を味わっているのである。

バスセンターの階段の踊り場の鏡の前で、小さな男の子を連れた若いお母さんが、今日のオシャレのデキをチェックしている。カンペキにキメて、携帯のメールをチェックし、口を結んで、ウンと一つ気合を入れる。男の子が真似して、ウンと気合を入れる。いい瞬間だ。見ているこちらにも、街と同化した気分になってくる。

二人は、アーケードを通り、いつもの角から路地に入り、新しくできた「手作り工房ビル」に向かう。ここは、靴、鞆、宝飾品などの若い作家が



アトリエを構え、作品を作りながら、販売も行っている。また、教室も開催していて、受講者それぞれがデザインしたオリジナル作品が完成するまで指導してくれる。母親は、子どもの靴を作るためにもう4ヶ月通っている。靴は、小学校の入学祝いとして、この子にプレゼントするつもりだ。

この工房ビルには、入居した作家の活動を支援する総合プロデューサーがいて、イベントの企画や販路の開拓など、作家の創業支援をしてくれる。ここで育った人材が、上通地区にある古民家やビルの2, 3階に店を出す仕組み(ポスト・インキュベーターの仕組み)ができており、クリエイティブな街としての上乃裏通りが形成されつつある。



輸入雑貨を扱うこの店の前は、学生たちにとって、上乃裏通りで人気の待ち合わせスポットになっている。人気の秘密は、この店のペットで、街のマスコットにもなっているチャウチャウだ。実は、ここにはデートの時間に少し遅れてくる男子が多い。と言うのは、わざと遅れて、しばらく女の子をチャウチャウと遊ばせておいて、そこに「お待たせ」と言って現れる作戦だ。この犬の顔をさんざん見た後では、女の子の目には、イケメンはさらにイケメンに、並みの男子も普通のイケメンには見えるはずだ。

待ち合わせたばかりの(男子建築学科3年、女子文学部4年のカップル)いつも上乃裏通りを抜け、日航ホテルのロビーを通過して(ホテルに用はないけど)熊本市現代美術館に行く。美術館のロビーは、どこか我が家のリビングのような落ち着ける雰囲気があり、ソファにゆったり腰をかけておしゃべりする。周りでもいろんな年齢の人が、思い思いに雑誌を読んだりしている。さすがにホテルのロビーには、この雰囲気はない。「あまり多くの人には知られたくない場所だ」と思う。

その後きまってお茶するのは、上通のパビリオンだ。ここは、ぼくたちが生まれる前にできたらしい。アーケードの直線的な動線に対して、川の淀みのように脇へと人を誘い込む空間を提供している。アーケードの閉鎖的な空間が途切れ、外の光が通りに差し込む演出もよい。大きなケヤキやカシの木のある中庭には、金属製の4人がけテーブルが10セットほど置かれ、この庭を三方からブティック、レストラン、喫茶店が囲み、残りの一方は隣のビルの壁面になっている。中庭から見上げると、周りのビルの壁面をツル草が覆っているところや、立体駐車場のタワーなど、よそ様の“裏”が丸見えだが、そのような場所に身を置くこともオシャレに感じる空間演出がされている。

この空間、この雰囲気、結構いいんじゃないの!? 閉鎖的で直線的なアーケードの裏には別の顔のまちがあり、そこに踏み入ってもいいんだ!! と、パビリオンの出現によって熊本市民が気づいたのではないか(意識の下で)。

そう考えると、パビリオンがあったから、“上乃裏的展開”が始まることのできたのかもしれない。「設計者の葉祥栄氏は、パビリオンによって“裏へのドア”を開けたのだと思わない?」と彼女に聞いてみた。……

隣のテーブルでは、おそらく母と同年代であろう女性たちがお茶している。その様子は、ケヤキの木と同じくらいこの空間になじんでいて、良い。



注) 上乃裏的展開: 上通アーケードの裏路地である上乃裏通りは、戦災を免れた古民家を改築した店舗が増え、この15年で、かつての住宅地が賑わいの街へと一変した。